

情報という現実性

河本 英夫

情報は単独のシステムではない。それはエネルギーやエントロピーが単独のシステムではないことと同様であり、さまざまな活動態の「断面」に留まる。エネルギーは測るための枠を必要とする。この枠のなかの開始点と末端で成立しているとされるのが、「エネルギー保存則」である。またエントロピーはあらかじめ系が設定されていなければならない。大域的な開放系では、エントロピーを語りようがない。エントロピーは、その系のなかで「極大」となって終わる。一切の運動を欠いた平衡状態となるのである。

通信技術から見たとき、エントロピーと情報は、類似したかたちで定式化できる。内在的な不均質性の度合いが問われるのだから、同じ定式化を活用しても問題はない。だがエントロピーはある系のなかで極大で終わるのに対して、情報は無限に拡散するように見える。ここに情報の特質がある。

また情報は、何かについての情報でもあり、別のものにかかわるある種の「志向性」をもつ。その意味では、意識や言語に近い性格をもち、世界大の現実へとかかわっていく志向的な可能性をもつ。その点では言語や記号と同様に、ただ平行して作動する多くのシステムの一つなのではない。底引き網のように、網はそれとして稼働するが、網目に引っかかるものは何でも絡めとっていく。この絡めとる網目の大きさを自在に調整できる点が、情報と自然言語の違いである。

網のように世界の現実と絡み合っていく点が、情報の志向性であり、一般的には「何かについての情報」という側面である。他方情報は、自動的に作動する。情報は次の情報に接続されるものは、どのようなものであれ、次の情報を生み出す。精確に言えば、次の情報が生み出され、既存の情報と接続するものは、情報ネットワークのなかに組み込まれ、それとして「情報」となる。ベイトソンの言う「差異を創り出す差異」こそが、情報であることになる。この段階では、「情報ナルシス」という特質が現れてくる。情報はただ別の情報と接続することで、それとして成立する。こうして情報以外の現実性につながる回路と、情報相互がつながる回路での分岐は極端に進む。それが情報システムである。

情報は、ネットワークとして、それじたいの内部に訂正可能性をもたない。何かが出現し、それに接続可能なものであれば情報として活用される。そして接続可能性が見込めないものはいずれ消えていだけであり、いわばゴミになるだけである。それじたいに一切の選択性をもたないものは、定義上「ゴミ」である。

言語・記号一般と同様に、情報も現実とは一対一対応はしない。一つの現実を別様に表記することは表現の可能性を高める。だが誰にも理解できない表現になれば、情報ネットワークに留まることはできない。しかし特定の人間もしくは受け取り手にだけ通じるように改変することはできる。これが「暗号」である。軍事や政治的な陰謀で繰り返し活用されてきたが、文学的な作品ではっきりしたかたちで登場したのは、ポーの「黄金虫」である。ここではアルファベットの統計的な出現頻度に合わせて数字を置き換えていくもので、トリックとしては初級のものである。またごく普通の日常言語的表現に、こっそりと二重の意味を込めるように裏の意味を込めることもできる。これも古くから繰り返し用いられているもので、通常の日常表現に同時に、こっそりと裏のメッセージを込めるやり方である。

そうした裏のメッセージが込められていることに敏感に反応してしまうものがある。ナッシュ均衡を定式化したジョン・ナッシュは、普通の新聞の文章に特殊なメッセージが込められていると読み続けており、自分だけに宛てられた秘密の指令だと読みとっていた。ナッシュの伝記的な作品である『ビューティフル・マインド』では、いくつかの単語は文法的な配列とは異なる輝きを示してつながってしまっている。

他方、情報はネットワークとして疑似自律的に作動し、そこで固有の現実性を創り出していく。一般的には芸術的な創作ですでに実行されているものである。このとき情報と情報制御機構を活用して、現実そのものの内実と範囲を変えていくことができる。事実、「仮想現実」や「拡張現実」において、現実性の幅が決まらなくなっている。そのとき同時に経験のモードも変わっていくはずだが、経験そのものを有効に拡張できるものや、現実性をより豊かにしていくものの内実を決めることが極めて難しくなっている。精確に言えば、経験を有効に拡張できず、世界の側の選択肢を広げることもない莫大な情報が飛び交うようになっている。つまりガセネタやゴミ情報の氾濫である。

こうした場面で、何が哲学的な課題となりうるのかという問いが生じる。そしてそれを明示することは簡単ではない。課題を明確にできないのであれば、すでに哲学は困惑と当惑のなかに巻き込まれている。哲学の課題の一つが、筋違いの議論を別様に転倒し、課題の方向性を設定し続けることである。また新たな現実の形成へと向けて、どのような選択肢があるのかを構想することである。つまり状況を前にして、前進可能な問いに転換していくこと、さらにはどのような展開見込みがあるかを構想として提示していくことである。

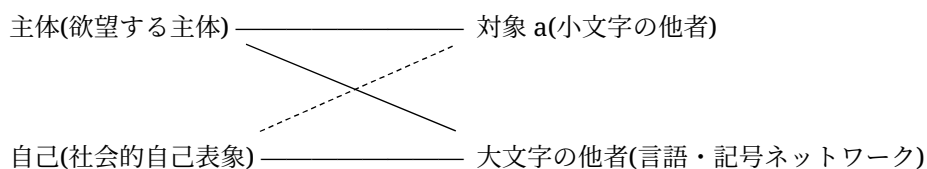
さしあたり情報ネットワークのなかで、個々人の欲望がどのようになっていくのだろうか。欲望の変質と行く先についての検討を加えておきたい。欲望にかかわる限り、精神分析的な議論との重なりが大きくなる。統合失調症や躁鬱のような脳神経系の変質を含む病態は、とりあえず除外される。また精神分析は、言語的な語りを治療法の軸としており、身体の振る舞いや運動を活用することはほぼない。つまり精神分析こそ、情報ネットワークに適合的な枠組みをあたえてくれるのである。

欲望は、現実性の拡張に応じて、大幅に姿を変える。つまり変貌していく欲望の在り方に焦点があたるように議論を組み立てなければならない。そのためには構造的な図式に変えて、変貌し続けるシステムに置き換えていかなければならない。さらに情報ネットワークの加速度的変化のなかで、人々の行動はどのように変化していくのかについて考察を加えておきたい。総体として、こうした課題設定は、社会精神病理学の装いをもつと思われる。

また情報は単独のシステムではないが、そのことの内実を詰めてみる。自動運転ロボットは、センサーとロボットを別建てでプログラム設定しなければならない。この二つのプログラムは、それぞれがAIのなかでより詳細になっていくに違いない。センサーのプログラムは固有に進化し、モーターのプログラムはそれとして進化していく。それぞれの進化速度は大幅に異なり、進化の幅もそれぞれで異なる。そのときプログラム間の連動をどのようにしてリセットし続けるのかが問われてくる。問われるべき局面がもう一段階上がってくる。そのさいの理論的見通しについて考察しておきたい。

1. ネットワークの欲望

情報ネットワークのなかでの個々人の欲望の変化について考察しておいた方が良いと思われる。だがこれを論じるためのぴったりの構想が見当たらないのが実情である。というのも情報は、そもそも感情の制御に適合的に作られたものではない。だが二次的に感情の変化をもたらしてもいる。そこで便宜上ラカンの精神分析を拡張して活用することにする。構造主義者であるラカンの最も一般化された構造的な仕組みは以下のようなものである。



これだけの基本要素を設定しておけば、心的活動のどこに無理が来て、どこに歪みが生じるかを論じることができる。欲望する主体には、それじたいの作動の理由も到達点もない。欲望は、ただ作動する。この特質は、たとえば空腹には理由がなく、また満たされてもいずれ空腹はやってくる。始まりの理由も、終わりの理由もない。活動態を捉えるさいに、アリストテレスは、活動の行きつく果て、すなわち目的を捉えなければならないと考えていた。だが欲望や本能的な欲求には行く着く果てはない。それは生きていることその

ものに行く着く果てがないことによる。死は生きていることの向かう果てではない。ヨーロッパ思想のなかにいくつか大きな誤解があるが、「生は死に向かう」というのもその一つである。植物が途中で枯れてしまうことは良くある。しかし植物は枯れることに向かっているわけではない。また自己組織化を基本とする世界では、何かが出現することにも理由はない。事象は事象だから出現するのであって、そこには理由は不要である。そうした理由もなく行く果てもない活動態が、欲望である。

ラカンは性的欲求を軸に欲望を考えていたと思われるが、本能的な欲求である食欲、排泄欲、睡眠欲にも基本的に違いはない。しかも付帯的な欲求が次々と分岐していくことは可能であり、情報ネットワークではそうした欲求の変質はいくらでも起きる。また欲望の作動のモードも変質していく可能性がある。ここでは構造主義的な発想に変えて、システムの構想に転換することが求められている。

情報ネットワークが拡大し続けることで目に付く形で違いができるのは、大文字の他者である。大文字の他者は、基本的には自然言語と文化的な記号の複合体である。ラカンの設定としては、自然言語とその派生態からなる単独のネットワークだと考えてよい。そして言語の特質から見て、これは音声言語のネットワークであり、身体的振る舞いをともなうネットワークである。そのため大文字の他者には、裏側で身体的な振る舞いが張り付いている。ラカンの後期の分類で、象徴界(言語的意味世界)、想像界(イメージ的世界)に並ぶ現実界(身体を含む非言語的世界)は、大文字の他者の裏側にある。

この言語的ネットワークでは、欲望や欲求は、こうした言語が語られる環境のもとで形成され、制御される。ここには人間固有の生育的な能力形成が想定されている。ここは人間学的な発想で考えておいたほうが良い。このとき欲望は言語を全面的に自分の制御下に置くことはできない。逆に言語は、欲望を自分のなかに取り込むことはできない。だが両者は密接に連動する。欲望と言語的ネットワークは、密接だが相互に外的である。そうした関係が「外密」である。システム的には「カップリング」と呼ぶべき関係である。

そして両者の境界に「無意識」が出現する。この無意識は、言語からはどのようにしても到達することはできず、また言語の合理的な制御にも落ちない。だが言語からは明確に規定できない関係で密接につながっている。欲望する主体から見れば、言語は放棄する可能性がないように、みずから降りかかってくる。そしてそれがどのように経験に組み込まれたのかも知りようがない。幼少期の言語習得期では、言語はなぜそうしたものののかもわからず、また選択的に拒否することもできない。つまりおのずと降りかかっているものが言語であり、経験と言語との関係そのものは、経験からも言語からも明らかにならない。未決定な関係のまま密接性が維持されているのが、欲望と言語的ネットワークの関係である。

そこにさらに情報ネットワークという巨大な仕組みが入り、多くの場合文字情報と映像表現を中心とする表現手段をつうじて、際限なく平行する多平行ネットワークに変質していく。こうした言語的ネットワークの情報化にともなう欲望そのものの内実と作動

のモードの変化が問われる。

この変化にはいくつものモードがある。情報ネットワークの作動に対応して、欲望そのものの作動モードが変質する場合がその一つであり、たとえば次になにかがもたらされるという「情報の飢」に恒常的にさらされることで、経験は別の作動のモードへと巻き込まれてしまう。そこでは言語と経験のかかわりの変容が起き、経験のモードそのものが変容する。目覚めれば、SNS に接続し、なにかが伝えられていないかを確認する。こうして経験の基本的なモードに変化が及ぶ。経験はいつも待ち受けモードとなる。

その延長上に、情報反応性の反射反応が広範な広がりを見せる。まず相手の話を聞く力がなくなる。話をじっと聞き、言葉や言葉の意味ではなく、言葉をつうじて相手の経験を取るような聞き方ができなくなる。自分の経験を動かすようにして相手の経験と連動させるのではなく、経験の手前で、情報という断片化された言葉に反射反応する。そしてただちに「騒ぎ」を起こすのである。

おそらくこの延長上では、一般的に言う「理解」さえできなくなる。こうした在り方を**情報ヒステリー**と呼んでおきたい。この場合、経験に奥行きも懐の深さもできず、言葉に反応し、すでに持ち合わせた自分の枠のなかに配置することを理解に置き換えていく。欠落しているのは、「じっと聞く」「経験に落ちるように聞く」「自分の経験のなにを作動させるかを感じ取るように聞く」というさまざまな聞く経験のモードである。

それを欠落させるために、多くのことがわからなくなる。情報を受けて、言葉を振り回すことだけはできる。相手の言葉を聞き、反応しているようだが、いつも反射反応なので、経験そのものが微妙になることも、こなれていくこともない。そしてしばしば周囲からはまったく理解できないような挙動が出現する。

ときどき電車の中でも見かけるような光景がある。電車通路のなかで、スマホからワイヤーで何か音楽を聴いているような女性がいる。30歳前後の眼鏡をかけ髪をポニーテイルのように結わえた小柄のかわいい女性である。電車が駅に近づき、つまずくように停車したとき、この女性の後ろにいた中年男が電車のなかでゆられて、この女性の背中に少し触れた。この中年男は、右手で吊革をもち、左手でカバンを抱えている。この女性は突然振り向き、「テメエー、ナニスنداヨー、ケイサツニツキダスゾ、オリロ」と叫び始めた。周囲にいた人の半分は、何が起きたのかという怪訝な面持ちであり、もう半分は「またキレタ」といううんざりした顔である。

この女性は居場所がなくなってその駅で下車してしまった。スマホで音楽を聴いているのだから、その状態で発声すれば度起こした大音声となる。しかも電車の中で自分だけで「閉鎖系」を作っており、そこが侵害されたと感じれば、度を越した反応が出る。明らかにヒステリー性の反応である。スマホがらみの情報には、情報一般にふさわしい公共性がない。情報と言いながら特殊な閉鎖性を作る。そこに予想外の介入があれば、ほとんど理由も結末も理解を絶した振る舞いが出現する。いわば「キレル」という事態が頻繁にこともなげに出現する。情報は一般に量的に増大すれば、増大局面に反比例するように、視

野も経験も狭くなる。

言葉に対して、敏感感応する場面は、基本的に病的には「神経症」である。神経症全般は、『精神医学診断表』からは項目としては姿を消し、「人格障害」のひとつ項目に配置されている。いわゆる社会的な不適合の集合体である。神経症の構造的な特徴は、(1)言語行動や行動一般にことごとく裏面で「自己正当化」が伴っていることであり、(2)言葉の範囲と現実性の範囲がほぼ重なっていることである。自己正当化の構造的な支えができていない場面まで進んだものが、神経症性妄想、すなわちパラノイアである。一般に神経症は、フロイト、ラカンとも特定の言葉の抑圧から生じると考えている。現代の神経症の特質は、特定の言葉を抑圧している自分自身への自己正当化に力点が移動している。この自己正当化をつうじて、「演技性人格障害」や「自己愛性人格障害」へとこともなげにつながっていく。神経症は、病的に見れば、統合失調症にもうつ病にも背景的な一部として出現する広範な病理である。それは作為的な自己維持にかかわる無理のことであり、それが行為の無理となって出現する病理である。

情報の受け取りは、あらかじめ予期の範囲が極端に限定されている。情報は次の情報の待ち受けの予期しかもてなくなる。そこには他者も環境も自然もすべては作動する情報の外に自動的に区分される。予期があらかじめ限定されていれば、経験の幅も弾力もほとんどが失われてしまう。

情報ヒステリーは、恒常的に特定の枠で情報を待ち受けていることがベースにある。たとえば送られてくるメッセージとともに、あらかじめ待ち受けの枠が用意されており、それが作動すれば自動的に、機械的に反応するのである。あらかじめ絞り込まれた予期の枠に対応するような情報が流されるようになり、その情報に反応するのだから、情報量は増えても経験はどんどん狭くなっていく。この事態は広範に見られるもので、SNS では多くの場合、情報量の増大が、経験の狭まりをもたらす。

待ち受けの枠には、自己主張の枠と、自分が自分自身で禁じている項目とがある。特定の自己主張の枠に引っかかれれば反応する場合は、反復性の反射反応であり、いつも同じパターンで、いつも同じような反応を繰り返す。「また同じことを言っている」という反復の基本形が出現する。ここに情動の固着が入る。反射反応だからそのつど当人はすっきりはしているのだろうが、周囲からすれば、なんでわざわざというようなことを繰り返す。これは本人の自動的な情動の繰り返しであるから、言ってみれば、**情報・情動ナルシズム**である。これが出たときには、その人物は物事をもはや精確に捉えることはできないと考えてよい。

ここでは精確に言葉を捉えることが問題なのではなく、経験は特定の感情を繰り返すことに向いてしまっており、ときとしてこの感情に合うように言葉を作り替える。ただ同じ感情を繰り返したいだけなので、すでに経験は終わっているが、SNS に垂れ流せば少数の共感者はいつもいるので、安心を得るためには SNS に垂れ流すのが手っ取り早い。情報ネットワークには、固着の集成的なささえが恒常的に用意されている。

他方、自分自身で禁じている項目にひっかかれば、反射性の「大演説」となる。大演説の垂れ流し場所が、SNSである。この大演説は、誇大妄想性のものにはならない。誇大妄想は、フロイトの言う「投射」を介することがほとんどである。

フロイトは「シュレーパー症例」の分析末尾で、投射を定式化している。骨子となるのは、(1)自分の感情を別様なものへと作り替え、自分の感情に自分で気づかないようになること、(2)作り替えた感情が、内発性のものではなく、自分の外からもたらされたものというように外に由来を転化するのである。たとえばある男が、ある女性に好意や思い入れ抱いていたとする。ところがその女性が自分に思いを抱いているので、自分はそれに応じているだけだと、感情の質もしくはモードを入れ替える。感情の由来は、自分自身ではなく、外からもたらされたものに作り替えられる。そしてその女性が行う振る舞いや身振りや言動のなかに、自分に寄せられる思いの証拠を、感覚知覚をつうじて際限なく確認するのである。自分自身の感情の制御に代えて、その女性への「観察」で置き換える。感情の制御は容易ではないが、観察によって際限なくその女性を捉え続けることは、認識の本性にかない、際限なくリビドーの備給を続けることができる。そのため感情を観察という認知へと振り向けること、さらにそれによって仮構された自分の感情を繰り返し確認するのである。フロイトであれば、「被愛妄想」と呼ぶべきものである。これだけのエネルギーが備給されていれば、行動は誇大であり、発話は妄想性を帯びる。

そして情報化社会では、このタイプの誇大妄想は背景に退き、反復性の固着行動となると予想される。誇大妄想の場合、たとえば本当にあの女性は私への思いを抱いているのだろうかという疑念はつねに何度も付き纏い、それを何度も否定していく。この否定に妄想の強韌さが作られていく。そうした鍛え上げられた妄想に代えて、何度も同じことを繰り返す情報ナルシスが前景にでる。その一部が、ストーカーとなる。

感情の発露は、なんらかの行動を帯びる。その行動に、不釣り合いなほどの大袈裟な振る舞いが出現する。ある美大系大学の公開講座で、受講生の女性が、不当な内容の講義を受けたということで大学当局を訴え、それを聞き入れない大学当局を民事で訴えた。見せかけは、「訴訟狂」である。「訴訟狂」と「演説狂」は、典型的な妄想の表現モードである。

この公開講座の外部講師には、刺激的な作品を作り続けているアーティストが並んでいる。いわゆる「取り扱い要注意」というアーティストである。こうした講師の講義を聞き「急性ストレス性障害」になるほどの衝撃を受けたとの訴えがなされた。当然のことながら、大学は個々の講師に要望をいちいち出すことはしない。そうなる何が訴えの内実なのかを掴むことは難しい。押し問答の末に、大学当局と公開講座の運営係が自分の要求を聞き入れないので、民事訴訟に及んだというのが、事件のあらましである。

一般的に考えれば、聞きたくもない講義を聞かされたのであれば、それ以上聞く必要もなく、その場合には大学当局の事務局に掛け合っ、て、受講料を払い戻すように交渉することができる。公開講座で募集に応じて参加したのであるから、それを取りやめるのである。次に自分の希望する講師陣を挙げて、次の機会にはそうした講師を呼ぶように努力し

てほしいと要望を出すこともできる。自分の意向に合わない講師の授業が行われたことに不満をもつことは不自然ではないが、それが公開講座を運営する大学のミスだということにはならず、また事態の改善を求めることは不自然ではないが、民事での筋違いの訴えに直接つながるものでもない。本人の主張と法的な社会的制度への訴えの間には、どうにも無理が生じている。

そしてそれは多くの場合、自分自身の選択肢を減少させていることから生じている。いわば欲求は発現の回路を極端に狭めている。そして妄想の初期症状の一つである「訴訟狂」のかたちを取る。自分自身の選択肢を減らすことによって出現する不釣り合いな挙動は、感情のもう一つのモードを表している。それが**情報・情動[0, 1]モード**である。情動は本来度合いをもつ。強い情動、ほどほどの情動、弱い情動のように、度合いがある。それは一般に強度性と呼ばれるものである。ここから多くの選択肢が出現する。ところが情報に浸透された情動は、[0, 1]という両極化の作動モードを帯びる。情報のなかに含まれる[good, but]という価値感情によって、度合いの判別が効かなくなり、[0, 1]のいずれかに両極化していく。場面ごとの選択肢を自分で消していくのである。これを場面ごとに積み上げていけば、言説レベルでは両極化した言説が出現し、その果てで、唐突な「訴訟狂」が出現する。

ここには個人的な事情もからんでいる。この女性受講生には、ヌード芸術は崇高なものであるべきだという思いがある。美大生に対して、かつてヌードモデルとして自分の身をさらし、報酬の支払いを受けてきた自分自身の前史への自負もある。その思いは一般的な個人の思いとして尊重されるべきである。だが他者に強制するようなものではなく、また他者にそれに合わせるように思いこむべきものでもない。この女性に見られる「自己愛性の傾向」は、他者への余分な思い込みとなり、過度な筋違いとなって出現する。

一般的に見れば、「固有なものは、どのようなものであれ、固有性として尊重されるべきである」。これは「弱者は、弱者として尊重されるべきである」と置き換えても良い。私は個人的には、可能な限りそうであってほしいと思う。しかしそれは個々人の固有の関係性のなかでしか維持されないだろうという思いもある。一般的な社会原則として述べることも、他者に半強制的にそれに同意するよう求めることも、困難である。個々人のネットワークのなかで、徐々に形成されるべき社会的配慮ではあるが、社会的規則として設定されることはない。これが社会的存在のバランスというかたちでしか成立しない事象の固有性である。個々人の個性性にかかわる事象は、おおむねこうしたものである。自己愛性の傾向は、このバランスを崩すことでしか維持できない。

欲望と情報ネットワークとの関係で、情報は、文字情報と映像情報をつうじて膨大な量のものが流されるが、こうした情報が自然言語の発話と異なるのは、情報には語られざる内容がほとんど含まれないことである。自然言語の発話では、まさに語らないことによって意味を帯び、語らないことによって意味の膨らみと奥行きが形成される。その領域が膨大にあるからこそ「言葉」であり、「語り」なのである。常日頃 SNS で経験を動かしてい

るものは、逆に多くのことがわからなくなる。

そして情報ネットワークの作動の速度が速いために、情報の授受に対しては、敏感感応が起きる。この速度への対応不全が、情報・ヒステリーである。この速度への対応に反復的に応じようとするのが、情報・情動ナルシスである。そのとき経験に奇妙な特質が生じ、そのモードが情報・情動[0, 1]である。一般的に考えれば、欲望と言語の間には、緩やかでしかも密接な関係しかない。これが「外密」であった。だが主として、情報の速度を基調とする情報側の変化によって、欲望は出現の仕方を否応なく変えざるをえない。この変化は、いずれは欲望そのものの変化をさらに生み出し続けていくに違いない。

副次的に、感覚神経不全でしかないものが、情報ネットワークで別様に拡張され、別様な効果を生み出すこともいくらかでも起きることである。こんな事件があった。ある学生にとって同じ風景が一日に何度も浮かんでしまう。意識の制御とは無関係に、非志向的に浮かんでしまうのである。非志向的な想起という PTSD に広く見られる神経機能不全である。一日に何度も同じ風景が浮かんでしまう。そこでその学生は、像として浮かんでくる同じ人物に向けて、メールを発信し続けたのである。内容は、「あなたはどのような死に方をしたいですか。それを私に伝えなさい。そうすれば私がそれを実行してあげます。」この文面をマシンに残しておき、同じ想起像が浮かぶたびに、同じ文面をリピートで想起像に浮かぶ人物に送り続けたのである。一日に 20 回を超える頻度である。起きていることは、単純な想起障害である。この事態が SNS につながってしまった。

こうしてこの文面を送り続けられた人の居住する東北地方の県警からパトカーがやってきて、この学生は都内で逮捕され、移送された。21 日間の留置場での取り調べの後、近くの市の精神病院に移された。ここで管轄が警察から保健所に代っている。この学生は警察の留置場に置かれ、最後の段階では地検になんとか連れていかれて、立件が難しいと判断されている。精神病院に移されて以降、ひと月ほど経ったところで、私はその病院まで面会に行った。大学関係者の誰かが面会に行かなければ、病院を退院した後の学業への復帰について、詳細に検討することはできない。精神病院の回廊を進む途上で、散歩していた本人にばったりと出会った。本人の目つきに不自然さはあるが、挙動にはおかしなところはな。ただ社会復帰までには少し時間はかかると感じられた。おそらく服用している治療薬の影響もある。本人に、調子はどうかと私は尋ねてみた。本人は「病院のご飯より、留置場のご飯の方が美味しかった」とだけ無造作に答えた。

ラカンの図式的な構想のなかで、際立っているのが、対象 a である。対象 a は、心が不安定となり、不安な状態になれば、経験のどこかに出現して、経験に支えをあたえようとするようなある種の安定化のための変数である。通常は消えていて、現前化することはないが不安定状態のなかで出現する。

いま眼前に鏡を置き、自分の像を映してみる。映っている像のなかで、自分の姿を消してみる。眼だけが残る。さらに眼の形も消してみる。そうすると鏡のなかからこちらを見

ている「まなざし」だけが残る。外から自分自身を見ていて、なにかのきっかけで出現する「まなざし」のことを対象 a だと考えておいてよい。ある意味で自分自身の経験の分身であり、経験に外からまとまりをあたえる以上、経験にとっては超越論的な原理である。そうした原理が経験のなかから立ち上がってくれば、反省的な自我に類比した超越論的原理となる。ところが対象 a は外からやってくるのだから、外から介入するかたちで経験はまとまりを再度獲得することになる。

そして対象 a は、多くの場合それじたいでみればほとんどとりに足りないほどのものなのである。たとえば耳のピアスであり、髪を束ねるカチューシャであったりする。意識の焦点化をとまなうなんらかの具体的なイメージであれば、対象 a になることができる。多くの日本人にとっては、ほとんどかかわりのない原理なのかもしれない。自分の経験のまとまりを支えるような外的イメージをもつ必要はないことが多いのである。なぜラカンは対象 a を強調していたのか。それは構想のなかにこっそりと部分-全体関係(換論的關係)が組み込まれ、全体をまとめ上げるような原理を想定しているからである。

システム的に考えれば、システムは作動し続けることによってそれ自体がそのつどまとまりを形成する。そこにはあらかじめ全体を取りまとめるような原理は不要であるだけではない。むしろそんなものはない方がシステムの動きはスムーズになる。システムは緊急時になんらかの支えを必要とする。そう考えるのが構造主義的な発想である。そんなものなくても、システムは作動をつうじて自己治癒する。ラカンの場合不安定さが高じたときに出現するものとして、対象 a を設定している。そしてこれが古典的な自己治癒モデルであり、支えを回復するというモデルなのである。

全般的に考えると対象 a は、自分自身の「原風景」のようなものに近く、いつでも思い起こそうとすれば思い起こせるものである。想起しようと思えばいつでも想起できるものに近い。これは経験全般にとって重要な意味をもっているのだろうか。昨日の晩御飯の風景を想起してみる。ある断片的な場面が思い浮かぶ。しかしその 5 分前の風景もあったはずであり、5 分後の風景もあったはずである。イメージ記憶は、いつも特定の場面の切り取りから成立している。この切り取りの理由はよくわからない。固有の意味が含まれているとも思えない。ただそうした個々の場面をとまなうイメージがあることは間違いない。

そして情報ネットワークのなかでは、記憶に残るような断片の表現が優先されていく。それをうまく設定することは、作品を何度も経験したいというリピートの欲求につながっていく。その場合、対象 a は、作品作りのテクニカルに活用すべき変数の一つになるのである。それは記憶にかかわっている。あるいは個人史にかかわっていると言ってもよい。そしてそのなかに経験全体にとっての彩をあたえるようなイメージ像はあるに違いない。だがそれがどのように経験の安定化や経験の自在な作動に関与しているのかはよくわからない。

私にも思い起こそうとすれば思い出せるイメージ像がある。保育園の砂場でくたくた

になるほど遊んだ夕暮れに、西日を受けてまぶしそうに遠くを見ている自分自身のイメージ像である。それが何を意味し、何を支えているのかと問うてもほとんど不明である。一時的に意識の全域をまとめるほどの効果があるとも思えず、また非志向的に浮かんでくるほどのものではない。ラカン自身は、対象 a の内容を、乳房、糞、声、まなざしだとしている。

対象 a はどこかで意識の深層に触れるものでなければならない。そして文化的な要素のなかで、意識の状態をリセットして、状態を変えていくものだと拡張解釈すると、対象 a の機能性がにわかに広がってくる。通常はごく常識的な普通の人であるのに、なにかのきっかけで「まるで人が変わったように特殊な状態になってしまう」ことにかかわる要素がある。この場合、対象 a はもはや防衛的なものではなく、むしろ当人をトランス状態に移行させてしまうようなものである。宗教的なものであれ、芸術的なものであれ、この場合の対象 a は感覚的確信に満ち、平均以上に能力をさらに発動させるように働く。情報ネットワークが、そうした要素の起動にかかわることはあるに違いない。そしてそれは犯罪にもかかわるような場面まで敷衍することができそうである。

かつての「少年 A」は、「バモイドオキシ」という自分のための神をもち、「アングリ」という自分自身のためだけの儀式をもっていた。少年 A の中学生時代である。それらをとおして犯罪を実行し続ける自分自身を安定化させていたのである。そして犯罪を続けているときも、社会に対して、サカキバラセイト(榊原聖人)を名乗り、発信を続けた。この局面では犯罪性向はよくわからないが、特殊なトランス状態が起きている。

対象 a の範囲を防衛的働きの範囲を超えて拡張していくことは可能である。その場合には、言語そのものの在り方も言語の意味も変えてしまう。あるいは言語の裏側を支えている身体行為を全面的に別様に組織化することもある。つまり対象 a は自分自身を組み換えるほどの威力をもつ範囲まで拡張することはできる。

シュレーバー症例のなかでシュープに至る局面で、シュレーバー自身のイメージの確信は、「女になって犯されたら、素晴らしいことだろう」というのがある。大学の演習の時間に、この話をしながら感想を聞いてみたら、男子学生で夢のなかでそうした情景は何度も出てきたというものや、いつもそうした思いをもっているという男子学生が数名いた。

あるいは「言葉で食事について語ることで、言葉を食べることは等しい」というような事象的なイメージが語られることもある。この場合には、口腔の作動で、空気の調整(語ること)と咀嚼の強さ(噛むこと)が、同じ活動態の別の局面での現われとなる。対象 a を拡張していくと、統合失調症の範囲まで経験を広げることができる。統合失調症は、言語的な秩序の解体などではない。それは末端の結果だけを見ているのである。むしろあるイメージをきっかけとして、ラカンの図式そのものを組み換えるような活動を行うことがある。統合失調症の圧倒的な多様さは、構造的な図式そのものの解体を意味している。言語の解体は、すでに言語的構造の特徴ではなく、別様のシステムが作動し始めたことの副

次的な結果である。それは言葉が出現する場所で働いているシステムであり、そのシステムに自分の経験を連動させようとするれば、たとえ精神科医であっても特殊な訓練が必要となる。

ラカンの図式で、左下に配置された「自己」は社会的な自分の像である。社会のなかで、自分自身だと他者に振り向けられた像をもたないのであれば、社会存在としてやっていくことはできない。これは他人向けに作られた自分自身の像である。そして情報ネットワークのなかで、この「自己」の像が、一通りで決まらず、偽装や仮装に満ちたものとなり、ときとして分裂したまま使い分けるといような事態も起こりうる。

ユーチューブの画像には、時として、アニメ風のパーソナリティが配置されることがある。「三千院心」「カップえんちょー」「みいたん」「AKARI」等々は、原稿を読み映像身体の定型の振る舞いはあるが、印象画像に近い。それでも公的に作り出された「自己」である。情報内容、雰囲気、論調に応じてキャラが出るように設定されている。情報ネットワークのなかでは、代理自己や匿名自己、偽装自己は、ごく普通のものとなる。SNS のなかでは偽装された自己と現実の自己との乖離は、ごく日常的なものとなる。

東京新聞の女性記者 M は、官房長官への筋違いの大演説質問で有名で、本人の固有名でハラスメントの名称が作られるほどだった。SNS では、ターゲットとなるものがあれば、ただちに仁義なき戦いが起きる。仁義なき戦いの大半は、便乗組である。そのとき女子中学生の発起人名で、M 記者支援署名の SNS での呼びかけがなされ、膨大な数の支援署名が集まった。ところが女子中学生が発起人とされたこの呼びかけを行ったのは、実際には 50 代のただのおばさんだったことが判明し、呼びかけアカウントはただちに削除された。こうした騒ぎを繰り返しながら作動を続けるのが、情報ネットワークの特質である。韓国ネタを発信し続けた「三千院心」と「カップえんちょー」は、ユーチューブ当局に送られた集団的なクレームに晒されて、コンテンツが削除されたり、発信活動が停止されるという事態が起きた。「カップえんちょー」については、本人名の偽造コンテンツが何種類か配信され、チャンネル乗っ取り騒動まで起きた。

ネットワーク用の「自己」の仮構はいくらでも可能であり、生身の自己の悲惨さに対応して、ネットワーク用の自己は「過激な姿」をとる。犯罪になるほどの過激な言論をネットワーク内で行うものを捕まえて見れば、無職で一般社会では誰からも見向きもされないような人物だったりする。SNS の自己と一般社会の自己が乖離したままになることは普通のことである。社会的存在としての自己は、社会内に実現される自己像のことではもはやなく、代償自己、偽装自己、演出自己等々の機能性に粉飾されたものになっている。

こんなふうに考えていくと、ラカンの図式も総体としてほとんど変質してしまうことがわかる。欲望する主体のなかの食欲、性欲、睡眠欲、排出欲のような基本的な欲求だけではなく、小さいがいくらでも肥大化できる欲望が次々と生み出され、現実を覆ってしまうのである。たとえそれらが付帯的な見せかけをもとうとも、本人の行動を強く促すので

あれば、無視できないほどの要因となる。

また大文字の他者は、任意に作動を続ける枝葉のようなもので、どの程度の広がりか進行しているのかをおそらく誰も見分けることができない。ミニネットワークは際限なく作り出され、同じ日本語を使っているのだからメッセージは通じるはずだという期待も、気づいたときにはスルーされてしまうほどの分岐が進行する。これらのネットワークに応じて、欲望の形態も変化していく。

こうした場面で、対象 a も、経験が不安定になったときの防衛的な役割を果たすだけに留めることは、むしろ不自然である。内実として、対象 a は一つに留まる必要もない。むしろ経験をさらに弾力をもたせ、より有効に作動させるためにどのようなイメージをもちうるかという課題に対応するように再設定したほうが良い。経験の安定化ではなく、むしろさらに新たな創造性と生産性に向けてどのようなイメージが有効かという問いのもとに設定できるような経験の範囲に、対象 a を置いたほうが良いのである。こうなれば、大文字の他者(言語・記号)も、対象 a も、自己もことごとく変貌したものになると予想される。

手続き的経験と理解 現代の情報化による変化のなかに含まれるいくつかの精神病的変容にかかわる共通の事柄がある。SNS は、基本的に理解可能性だけに向けられたメッセージからなる。数学講座や初級力学講座のようなものは、適合性が低い。ここに知識のわかりやすさや伝達しやすさの問題ではなく、知のなかに含まれるモードがかかわってくる。数学、物理、論理、システム、経済、法等々は、手続き的な知識である。精確に言えば、手続き的経験である。この手続き的経験で獲得されるのは、技能である。これはたんなる理解されて記憶されるような知識ではない。最も極端で単純な事例で言えば、自転車に乗ることは技能の修得であって、知識の理解ではない。自転車の乗り方は「分かっているが、乗ることができない」という事態は、知能の在り方を取り違えた筋違いのかわりなのである。記号論理学を学び損ねた学生がときとして質問にやってきて、回答の仕方を覚えるのですかという。これこそまさに筋違いの経験である。

経済や法の知識も、現実に自分自身の行為に対しての選択肢と指針を提供するものであって、言葉として「需給バランス」や「サプライチェーン」という言葉を理解することではない。少なくとも、こうした語に対しては仕組みのなかにどこに変数や選択肢があるのかを探るような理解の仕方をしなければ、ただの言葉を覚えることに留まってしまう。

とすると SNS の言説では、経験の動かし方が身につかず、言葉の理解しかもたらされない知識が飛び交うことになる。見かけ上の情報量は多いのに、経験がとても狭い者たちが大量に出現する可能性がある。多くの情報を振り回しながら、経験はほとんど動いておらず、結局のところ「ほとんど何もわからない」者たちが生まれていく。それが SNS 時代の情報である。

教育現場では「アイクティブ・ラーニング」がしばしば語られる。教員の側からの知識の伝授だけでなく、学生の参加を促すことが必要だという趣旨のことが説明として付

け加えられることが多い。しかしこれでは授業形態のモードを示しているに過ぎない。必要なことは、授業をつうじて「手続き的経験」を修得することであって、これは知識を理解することではない。手続き的経験の必要条件は、「分かること」だけでなく、「できること」であり、経験を行為として実行する能力である。異なる選択肢の可能性を感じ取り、別様にも進んでみることができるという経験の習得と、立場や観点から意味を理解するということはまったく別のことである。

手続き的経験は、経験を一つの行為として実行する。それに対して、理解は提供された知識を配置し、場所をあたえることである。そして経験にその位置価をあたえることである。その場合、経験のなかに配置された知識は、すでに消費ネタになっている。手続き的経験は、別様に進んでみることの素材として、知識を受け取り、それを別様に進むことの手掛かりとして活用するような経験の仕方である。情報化社会では、間違いなく、手続き的経験が減少し、消費ネタ理解が増えていく。

語句敏感感応性 そのさい経験は新たな選択肢へと向かって展開していくのではなく、言語的な理解によって次の発信をどうするのかに力点が移ってしまう。経験はきわめて小さな幅のなかをさらに小さな起伏を求めて作動するようになる。ここに「情報の飢え」が生じる。

ここには大小の病的な言動が出現する。語に反応する「語句敏感感応性」や、語への固着をとともう「語句原理主義」と呼ぶべき事態である。言葉は事実や現実をなんらかのかたちで表現するものである。語句をそのままとることはなく、語句とともに発せられた現実の輪郭を感じ取っていくことが、一般的な語句の経験である。

ところが語句そのものに経験が収斂し、語句が何か特定の事柄を含んでいるかのような経験の硬直が起きるのである。このときどこに選択肢があるのかという経験の流動性が消えてしまう。それを欠けば経験の基本性格が失われてしまうのだが、本人はそのことを感じ取っている様子はなく、また欠落していることに思い至ることもない。「語句敏感感応性」は、奇妙な緊張を抱えていて、自分自身の言動の訂正可能性をほとんどすり減らしてしまう。

語句に関連づけられる意味や出来事であれば何でも持ち出すことができるために、情報の支離滅裂が常態化する。論理性も事柄の関連性もほとんどないまま、語句がかりに連想的につながるものであれば、あらゆることが持ち出される。

そのあげく誰から見ても信じられないほどの言説が飛び交う。多くの情報を持ち合わせているように見えながら、学習の能力も減退してしまう。多くの経験が持ち込まれているように見えながら、学習そのものが減退するために、かかわらないほうが良い、言いたいだけ言わせて放置したほうが良いと感じられる広範な発信とそれに対応する人々が出現する。信じられないことだが、誰にとってもこうした人物は複数周囲にいる。

恒常的に嘘を平気で言うが、「サイコパス」に見られるようなその場しのぎのでたらめではない。むしろ本人はどこか一生懸命なのである。真偽や事実/非事実、あるいは論理

的に整合であるかどうかは一切問われることもなく、また本人はそれを吟味することもできず、ともかくも相手が反応してくれるまで、何でも持ち出し続けるのである。反応欲求とでも呼ぶべき奇妙な振る舞いにまどわれている。そうして多くの人は、こうした人物には積極的無視によってしか対応できないことにやがて気づくことになる。それらの発言は反応することを求めている言説と発信なのだから、反応しないことが最善なのである。

サイコパス サイコパス(精神病質)は、いまだ精神医学的な規定も明確になっていない病態である。犯罪者のなかにも一定頻度で含まれているが、犯罪者であるからサイコパスであるわけではない。逆にサイコパスだから犯罪者というわけでもない。だがいくつかの理由からサイコパスは、なんのためらいもなく、またいささか唐突に、犯罪に踏み込んでしまう。また人格障害(社会的適応障害)ではあるが、明確に責任能力はある。犯罪そのもののもみ消しも画策する程度には、犯罪もしくは犯罪状態への対応能力はある。

ロバート・D・ヘアは、心理家として刑務所で面談を行ううちに、奇妙な犯罪者の一群がいることに気づくようになった。そして統計的に多くの精神疾患の症例を集めて、そこからいくつかの特徴的な指標を取り出したのである。それによってサイコパスの輪郭は、かなり明らかになった。ところがヘアの資料は、すでに犯罪者と認定されているものから多くのデータを収集しており、サイコパスのなかでも特異な一群の症例を扱っている印象を受ける。この病態は、多くの症例から詳細な分析を行わねばならない。というのもサイコパスは犯罪にかかわる頻度が高く、かつ周囲の人が犯罪に巻き込まれる頻度も高い以上、できる限り多くの人に理解可能なレベルまで病態に届かせなければならないからである。たとえばヘアの記述に以下のようなものがある。

レイ(仮称)は、私ばかりか誰をも欺く信じられない才能をもっていた。おしゃべりがうまく、嘘もかんたんにつき、それがあまりに流暢だったり素直だったりするので、ときにはもっとも経験豊かで猜疑心の強い刑務所職員でさえいつとき警戒を解いてしまうほどだった。私が会ったときには、前科がいっぱいあり(あとでわかったことだが、その後も前科がふえつづけた)、成人してからの人生の半分以上を刑務所で過ごし、しかもその犯罪の多くは凶暴なものだった。それでも彼は、更生する用意があることを私や私などより経験豊かな人たちに納得させ、打ち込めるものを見つけたので犯罪に対する興味が完全に薄れたと信じこませた。レイは果てしなく、のらくらと、あらゆることについて嘘をついた。嘘と矛盾する点をファイルに見つけてそれを指摘しても、彼は少しも悪びれなかった。あっさりと話題を変え、まったくちがう方向に話をもっていった。

こういう風に描かれると、ただのおしゃべりで嘘つきで、ペテン師のように読めてしまう。そして誰しも身近にもそうした人がいる、と思ひ起こされる。ただしそのとき思ひ起こされているのは、ほとんどサイコパスではない。サイコパスの難しさは、一つ一つの特

徴を取り出すとその程度の人間なら身の回りにもいると思いがたることである。そしてそれによって理解しやすい人間類型へと接続して、誰しもわかった気になれるのである。

そして特徴として取り出されるものを列挙すると、「口達者で皮相的」「自己中心的で傲慢」「共感能力の欠如」「ずるくごまかしがうまい」「浅い感情」「衝動的」「行動のコントロールが苦手」「責任感の欠如」「反社会的行動」というような項目が並ぶ。しかしこれらは問題成人ではあるが、一定頻度で出現するような問題成人でしかないようにも見える。

先のヘアの引用文章で、こうしたレイのような人物も、自分の言葉を最初から疑っているような人を相手なら、もはや欺くような話はしなくなるであろう、と推測できる。むしろ警戒するはずである。またその程度の能力は備えている。いつも同じようなパターンで話すような「妄想様」人間ではない。にもかかわらず自分の話術のなかに簡単に相手を巻き込めるという自信と自負は、人並み外れたものがある。多くの場合、この自信と自負は隠されているが、最終的に本人を支えているのは、現実社会のなかで配置できないままになっている本人自身の由来の不明な「プライド」である。

実際にサイコパスに会って話してみればわかるが、強い自己愛性人格障害とそれが満たされない現実の社会への不満が含まれており、それは自分自身の仮構へとつねにつながっていく。おそらくサイコパスにとって、SNS はまたとない住処なのである。

売名欲求 大文字の他者は自然言語を基本とするが、発話は特定の人物による特定の人物からの発話であり、声や身振りをともなっている。そして特定の情景や特定の音声言語に反応し、この反応した経験を押しとどめ安定化する仕組みの一つが、主体が自分自身で及ぼしている「抑圧」である。できるだけ反応しないように押しとどめている状態を、「落ち着いた意識」だと自己認識している場合が多い。

ところが情報ネットワークに流れる夥しいコンテンツは、多くの場合、受信者の集合は特定されず、無作為に放り出されていく。また発信する側も、時としては匿名であり、場合によっては偽名である。精確には誰が発信したのかもわからない。誰が発したのかもわからず、受け取り側も不特定多数で宙空吊りになったコンテンツが流れるのである。

発信する側は、こうした状況下で発信したコンテンツに反応してもらいたい欲求がある。おそらく自分が発信しているにもかかわらず誰も応答しないのであれば、肩透かしであろうし、ひとときの寂しさもあるだろう。とすれば虚偽であろうが、事実と異なることであろうが、誰かに反応してもらいたいという強い欲求が働く。それは身体的な反応を呼び起こすほどの効果をもった発信となる可能性が著しく高くなる。つまりピンボールまがいの効果をもつ発信を行うのである。反応してもらいたい欲求は、伝統的に語られる「承認欲求」とは別のものである。ある情報に反応があることは、次の情報の作動に加担できることであって、別段承認しているのではない。Good という応信は、次にも引き継ぐことができるということであって、内容の良さのことではない。

言説は、事実や正当性を競うのではなく、次の反応を期待して、反応があることを目指してなされることになる。このとき発信者には、内容とは別の「自分を知ってもらいたい」

「自分の声を聴いてもらいたい」という思いが込められることになる。仮想名(無記名)の発信と不定集団の受信ネットでは、ともかくも発信する側は「知ってもらいたい」という欲求が前景化する。伝統的な承認欲求に促されてはいるようにみえるが、実際に起きることはいわゆる「売名行為」である。

「売名行為」では、発信する思いと発信された内容に大きな乖離が含まれ、発信する思いは理解可能だが、発信された内容はそれにまったく対応しないというような事態が起きる。「私の思いを知ってほしい」という願いは理解できても、その内容はバカバカしいほど希薄なことが多い。

デッドボールまがいの発信が行われれば、ただちに騒ぎとなり、両軍の全選手が飛び出してきて、乱闘となる。場合によっては、観客席のファン同士も乱闘を始めることがある。そして場数を踏めば、これもただの「見せ物」であることはただちにわかる。一般的に言えば、プロレスのようなショーの一部である。ショーであれば、その場が過ぎれば、ひと時の騒動で終わりである。ただし野球の場合、この騒動の起因となった選手や行為は処分対象となる。それは審判団が行う業務である。だが SNS には、こうした審判はいない。

なにか事件が起きれば、ただちにそれに便乗したい欲求が恒常化する。一般には「炎上」と呼ばれる事態である。炎上があれば、通常の火災であれば、放火犯がいる。この放火犯が特定できないのが、SNS である。炎上の便乗は、実際の火事現場でもしばしば起きる。炎上の仕組みは、局所的に急速に広まるインフルエンザに似ている。誰が最初にインフルエンザを持ち込んだのが特定できない。そうすると感染が収まるのを待つしかない、というような事態にもなる。インフルエンザの場合には、周囲は予防接種をして広がりを防ぐ。ところが「炎上」はまさに炎上機会を待ち望む欲求に、好機をあたえるだけになる。

現実と情報 自動車同士の狭い道路での接触事故を想定する。二人の当事者がいる。事故であれば、警察を呼び、契約している保険会社に連絡を入れ、人の身体に損害がない限り、民事に留まる。この場合には警察は不介入である。保険会社が双方の間に立ち、責任割合を決めて、支払いの仕組みを確定してそれで終わりである。このとき事故の当事者が、警察や保険会社に連絡を入れると同時に、SNS に相手を批判する投稿を行ったとする。この投稿は、現実の問題解決にはまったく不要で、かつときとして余分な騒動を創り出し、問題を別の方向へと変質させる場合がある。

言語表現は、あらかじめ反応することが見込まれる範囲に集中する傾向が生まれ、この傾向は言語表現に対して、「敏感感応性」という特質を広範囲に生み出してしまふ。これは作為的に作り出された「反射反応」のことである。ひとたび閾値を更新した反応性は、次々と敏感感応域へと進んでいく。周囲からは何故反応しているのかわからないようなことが起きる。あるいはなにか度を越していると感じられる反応が起きる。過度の反応に対して、さらに敏感に反応するネットワークが出来上がっている。「敏感感応性」は、ネットワークのなかで増幅される方向で半ば自動的に進行する。

欲望は、言語表現と通信の仕方に多くのチャンネルをもつようになる。見も知らない二

人が、挨拶を交わすように二人だけのコミュニケーションを形成することもあれば、誰も見向きもしないような発信を延々と繰り返すことも起きる。誰も受け取らない発信は、大演説となり、ただ流されているだけになる。また特定の人物に向けての訴えとなり、それが執拗に繰り返される。演説狂と訴訟狂は、「妄想病態」の頻繁に見られる外形的特徴である。これが SNS に流れ出すようになり、妄想性病態は、ごく月並みなありふれた光景となる。実質的に演説狂は、消滅する。つまり発信の平均水準が、すでに演説性を帯びてしまっている。だが訴訟狂は、特定の誰かを訴えるのだから、繰り返し炎上のネタとなる。訴訟狂の欲望は過度に満たされ、訴訟の味を覚えたものは、繰り返し同じタイプの訴訟を実行するようになる。

演技性人格障害と自己愛性人格障害 情報ネットワークは、それに反応してくれる人の連鎖で成立する。すると偽装してでも、反応のありそうな発信を行ってしまうという欲求に巻き込まれてしまう。事実や内容を超えて、反応を求める方向に向かうので、そこに不可避免的に「演技性」が絡まってしまう。「演技性人格障害」は、恒常的に平準化されたものとなる。演技性人格障害の最初の項目が、「注目されていなければ、面白くない」という内容であり、このとき自分と情報ネットワークというごく単純な社会関係だけになってしまっていることがわかる。ここでは裏側で、実生活上の選択肢の不足が起きている。

朝起きて散歩すれば、散歩の途次、近所の人たちとの挨拶から始まる。コンビニの店員との軽い挨拶をし、お昼前にはスーパーに買い物に行く。そこでも軽い立ち話をする。こうした日常の社会像と、演技性に装われたネット上の社会像は、確実に乖離していく。日々の日常で正規の職も決まらず、鬱積にまとわれた社会像の青年が、ネット上の像として、まっとうな演説を行ったり、特定の人物を繰り返し攻撃したりする。自己という社会像には、ネット回路に応じて確実に乖離が含まれるようになる。

その場面で出てくるのが、「自己愛性人格障害」である。内容は、自分は社会にとって貴重な人材であり、重要な人たちとかかわるべきであり、本来そうした人たちと交わるべき人間だと確信しているように、自分自身への過大評価と、多くの場合普段は覆い隠されているプライドからなっている。そしてそれを満たそうとすれば、確実に本人にとっての本人自身の余分な作為が生じる。大文字の他者が分岐し、小さなネットワークが形成されることに応じて、自己の像は内在的な解離性を帯びる。

こうしていくつかの典型的な特徴が浮かび上がる。

(1)情報ネットワークは、小さなネットワークであり、外交機密も特許情報も社内機密も顧客情報も基本的には、ネットワークのなかには出現してこない。情報ネットワークは、あらゆることに開かれているように見えながら、ごく狭い現実しか扱うことができな。しかもほとんど重要性のない情報である。そのため SNS の経験は、気づいたときには視野が狭まり、ガセネタを知識だと勘違いする強い傾向が生まれる。時として政治家のメッセージがツイッターに流れることがある。どういう反応が起きるのかを観測気球の

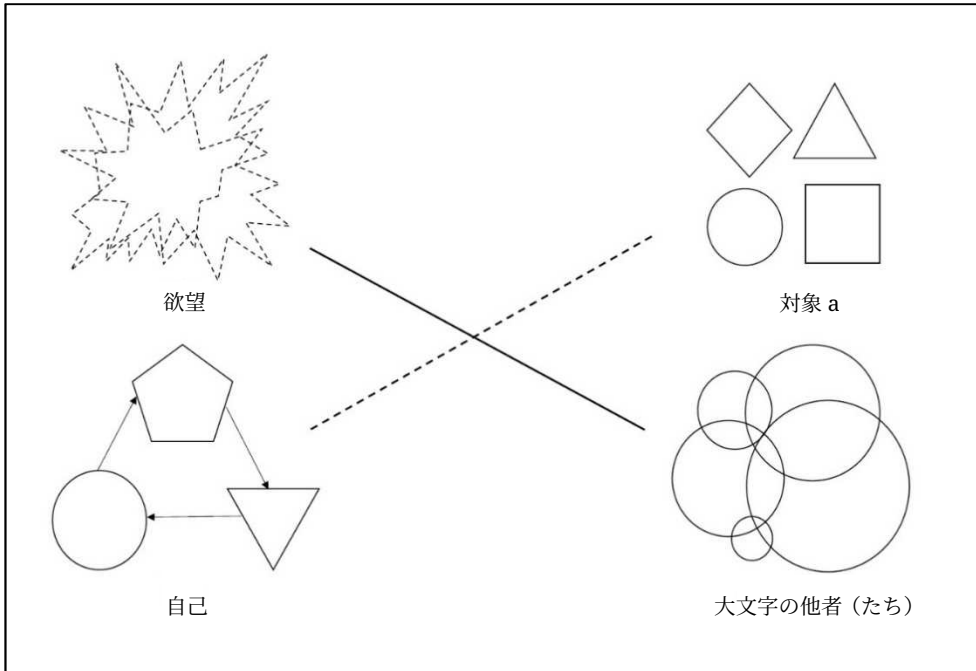
ように探っていくメッセージがほとんどで、公式発言ではない。

(2)情報ネットワークへの関与の比率があがるにつれて、行為の選択肢が減少していく。「わかること」と「できること」の乖離が生まれ、この領域では行為の選択肢を増やす方向での試行錯誤の訓練を積む機会を、おのずと放棄していることになる。評論家のようなことを述べる人たちは増えるが、その裏側で、新たな経験の回路に踏み出す機会はおのずと失われてしまう。そして個々の表現は、立場や観点から繰り出される「政治性」を帯びる。言葉に反応して、ただちに「差別用語」だと認定して騒ぐようなことはごく普通に起きる。たとえば「ハゲ」という言葉は、お笑い系の芸人が売りネタとして使ったり、それなりの風貌をそなえたジャーナリストがトレードマークとしてつかったりする。他方元国会議員が、自分の運転手に「このハゲ」と呼んだりする。言葉は、使われる状況や環境を離れては意味がない。それにもかかわらず言葉を単独で取り出し、その語の社会的価値を勝手に自分で決めてしまうのである。そこに軽度のイデオロギーが出現し、社会病理が発生する。言葉の単離は、情報ネットワークの特徴の一つでもあり、それを差別用語だと認定することが社会的主張だと思い込んでいる人たちが出現する。そこで起きることは、錯誤と固着の繰り返しだけなのだが、本人にとってはそれが一つの充実となる。

(3)欲望は、食欲、性欲、睡眠欲、排出欲のような基本的な欲求以上に、本来であれば測定誤差のような欲求がそれじたい肥大して、大きな比率を占める。しかも行為の選択は限定されているので、欲求と行為の間には筋違いのつながりが次々と創り出される。これらの欲求のなかには、自己承認欲求、他者攻撃欲求、被害者意識欲求等々の欲求が含まれ、自動的に肥大する。これが固着という現象になる。同じ欲求を繰り返してしまうことは「反復脅迫」に見えるが、起きていることは、同じ欲求への固着である。朝起きてただちにスマホを覗き、時間が空けばスマホを覗き、いわば慣性の法則にしたがうような惰性的行為が生まれる。これは情報刺激への飢えを生み出し、飢えが次の飢えにつながるような仕組みとなっている。「情報待ち受け欲求」という新たな欲求が出現する。持続的に仕事をし、自分を追い込みながら仕事をするという経験の仕組みにとって、情報待ち受け欲求は、実際には相当に大きな妨害になっている。おそらくまとまったかたちで本を読む者たちが激減する。

(4)社会のなかでどういう自己像をもつかは、社会生活を行う上では欠くことのできない生活の知恵に属する。ただし情報ネットワーク上の自己像と現実社会のなかの自己像は、極端にずれたものとなる。ここには演技性人格障害と自己愛性人格障害の広範な裾野が準備されている。

こうしてラカンの図式に変容をかけて以下のような図式となる。



2. 作動する情報と身体の中の情報

情報は間違いなく、単独のシステムではない。PC で数学的な演算を実行させるとき、オペレーションを続けて、演算の結果を短時間で容易に算定する。このとき演算だけが作動するのではなく、オペレーションそのものを作動させているいくつかのプログラムがある。多くはPCに内蔵されたプログラムである。自動的にオペレーションが続いているように見えながら、そのオペレーションの作動をもたらすプログラムは自動的に動いている。これはごく一般的な作動プログラムであり、「作動の順番」、「条件的分岐」、「繰り返し」を含んでいる。情報には、情報を成立させるプログラムや情報と連動するプログラムがつねにある。

またPCのオペレーションの結果は同じであっても、どのようなプログラムが動いているのかを判定することはできない。同じ結果を出すPCが同じプログラムを実行していることにはならない。つまりオペレーションの結果とプログラムの間には乖離があり、どのようにして同じ結果が出たのかもわからない。オペレーションの作動の結果は、同じプログラムが作動したことの証拠にも論拠にもならない。

かつてクリプキが『ウィトゲンシュタインのパラドックス』で議論した、「自分一人で規則に従うことはできるか」という問いの立て方は、実は「自分だけの規則」は果たして可能かという問題ではなかった。自分だけの規則を「規則」と呼んでよいかどうかという問題でもない。クリプキは、とても重要な問題に気づいていながら、問題の核心を取り違えていた。この問題の要点は、たとえ正しい回答を出している場合であっても、どのよう

な規則に従って正しい回答を出したのかが決まらない、という点にあった。2000年前後で日本で盛んに議論していたことが、AIによって別様に拡大されたかたちでさらに明確になった。58+67という演算を行って正しい解答を出しても、どのような規則によってその解答に到達したのかが決まらない。AIがまったく異なる規則で同じ解答を出すことは、ほぼ自明なことである。

情報では、視覚情報、身体情報、言語・記号情報を区別しておいたほうが良い。同じ情報でも異なる性質をもつからである。情報ネットワークで問題になるのは、言語・記号情報である。これはネット型になる場合には、情報量、情報速度、情報価値が主要な変数となる。情報量と情報速度は、5G、6G、7Gと順次格段に進行するが、それじたいはしばらくすれば生活上での慣れが来てしまう技術である。生活上でただちに慣れが来るものは、たとえ短期的に目覚ましい革新に見えても、それじたいは大きな変化ではない。ネット型の情報でより大きな影響を持つのが、ネットワークの規模であり、プラットホームを誰が握るかを競う競争である。これは情報社会学の問題であり、情報経済の問題である。中国のファーウェイが5Gで最大規模のプラットホームを形成した場合でも、ただちに5.5G、6Gが形成され、新たな世代企画で5Gからは翻訳できず、5Gには翻訳できるフォーマットを作ることは難しいことではない。そのため最大規模のプラットホームをどこが握るかは、しばらくは決着が付きそうにない。

ネット型経済価値の代表が暗号通貨であるが、暗号通貨を使って多くの店舗で活用できても、その範囲では汎用性の高い「商品券」に留まってしまう。ガス、水道料金のような公共料金の支払いに使えたり、納税に使うことができなければ、社会的な公共性を獲得するところまでには進むことができない。また通貨に留まっている限り、金融商品にはならない。各種債権は金融商品であるが、債権を暗号通貨で発行したり、暗号通貨そのものが債券であったりすることはない。

同じ「情報」という名称でも、異なることが言われている。色についてみると、裸眼で色相互の違いから約35000程度の色合いの区別はできる。これは人間の眼の識別による。AIセンサーでは、さらに細かく区別できる。とするとその区別に相当する自然言語は存在しないだけでなく、記号を活用したとしてもその区別に対応させることはできない。センサーは映像のまま分析を行い続けることができるが、その分析は、言語情報に落ちてくることはない。人間の眼でも同じことが起きているので、この視覚像と言語的表記の関係のギャップに奇妙なところはないのかもしれない。だが問題はその先である。

たとえば医療現場で撮られたCTスキャン像の比較から、センサーは独自の読み取りを行うことがある。センサーの眼は、人間の裸眼以上に優れているのだから、センサーの分析は人間とは異なるものとなり、人間とは異なる判断を下すこともできるようになる。それを人間は一つの「有効な示唆」として受け取り活用することができる。さらにその先で、センサーの判断から人間はどのような学び方ができるのかが問われる。センサーはおそらく有益な示唆の一つを提供してくれるに違いない。しかしそのことがセンサーにしか

できないのであれば、人間の経験はつねにセンサーを重要な示唆を提供しつづけてくれるもの以上にはならない可能性が出てくる。

一般に、PC データ処理が有効であるのは、通常の人間の経験の範囲内で、それまで人間の判断ではうまく処理できなかった領域へと AI が踏み込んでくれる場合である。作者レンブラントという名前が着いている絵に、どこかレンブラント本人以外の人が書いたものなのかという問いに対して、レンブラントの絵の特徴を読み込ませて、そこから外れるものを指摘させることはできる。著者名というのは、代表名であって、近現代的な「作者」とは異なることは良く知られている。そこで AI に判定させて、一つの絵のなかのどの部分は別の人が描いたのかを判定させるのである。

こうした事態は人間の予期の範囲内にあり、およそ想定でき、AI の指摘する判定も理解可能なものである。ダ・ヴィンチは天才的な画家だが、絵にはあまり関心がなかったと見えて、本人が描いた作品は、はっきりとわかるもので 12 点しかない。それ以外に、部分的にいくつかダ・ヴィンチが手伝ったと感じられる作品もよく知られていて、それは人間の眼でもはっきりとわかる。そうした理解可能性の範囲にあるものを AI で改めて分析させて、AI の判定だとして提示することはできる。

第一級の国際雑誌『ネイチャー』に投稿された論文で、社会の複雑性と宗教的信仰の推移をいくつかの指標から分析したものがある。社会的複雑性の指標を、人口、領土、行政のレベル等でおさえ、宗教的信仰については、儀式の頻度やモード、超自然的信仰の有無などの指標を盛り込んで、データベースを設定して解析をかけてみる。一般的には宗教的信仰が獲得されて後、高度な共同体が作られ、それによって社会的な複雑さが形成されてくると思われていたテーマ領域である。実際に AI に分析をやらせると、社会の複雑さの増大が、宗教的信仰の獲得に先行していたという事実認定を AI が行った。

従来の人間的解釈が、AI によって覆されたと話題になったことがある。しかし同じデータベースを使って、指標を少し変えるとまた別の結論が出た。AI をつうじた議論で盛り上がりがかかることは、それじたいは望ましいことだが、こうした議論の範囲では、すべて理解可能な範囲にある。タイプの異なる論じ手が増えているが、それでもすべて理解可能なのである。この段階では、知識や見方の数は増えているが、人間の経験が広がったわけではない。

理解の彼方 センサーの行った分析から、人間はどのようにしたら経験を広げていくことができるのだろうか。ごく単純に言えば、先ほどの CT スキャン像の見方やその分析について、人間は何を手にすることができるのだろうか。おそらく視覚像とその分析、またそれらとは直接は接点のない人間の言語への変換の問題であり、プログラム間の変換の可能性をめぐる問題が生じると予想される。これは人間の眼そのものの限界に対応している。

AI センサーは、自分のプログラムを詳細にする方向でさらにプログラムそのものを分節させ、判断を求められればデータに合わせた判断を行う。だが人間にはそこで何が起き

ているのかが分からない領域がある。

自然言語の特質は、自分でもやってみることができるということを、基点としており、それが学習の基本でもある。人間の経験にとって実行可能性のないものから、学ぶことはできない。AI がたとえ素晴らしい提言を行ったとしても、人間の実行可能性を超えたものは、受け入れるか拒否するかのいずれかになる。これが人間の能力からみた「臨界点」である。CT スキャンの像から、AI の出すデータを受け取り、「おおよそこんなことを示しているだろう」という理解可能性が及ぶ範囲がある。そこを超えてしまうと「何が言われているかがわからない」という理解を超えた範囲に到達し、そこからやがてそれを受容するか、拒否するかのいずれかしかしない状態へと進んでいく。これが臨界点である。対応に [0, 1] が出現してしまえば、そこでの人間の能力の形成はもはや期待することはできない。また理解を超えた領域での AI の判断が、正しいのか間違っているのかがわからないのである。情報は技術的には [0, 1] の組み合わせで作られているが、経験はそうした仕組みにはならない。ここでは**情報と経験の乖離は、構造的な必然性がある**。

身体情報 身体と視覚センサーとの落差は、さらに大きい。というのも身体に本来的な触覚性の情報は、視覚情報とはまったく別のモードで作動するからである。触覚情報は、たとえば机の上のざらつきや起伏を感じ取り、区分する場面では、おおよそ 4000 種程度の区別ができる。認知的に判別できる度合いは、かなり細かい。視覚的に色の違いは、35000 種程度可能だと言われている。色の違いの認定に比べれば、オーダーが一桁劣るが、それでも相当に細かな認知ができる。この色の識別の場合でも、光の量や対象の周辺の明るさによって、大幅に変化する。

感覚は、感知可能なものと感知可能でないものを区分する働きである。これが感覚のコード形成である。そしてコードの枠内で、さまざまな細分化が起きる。ここがプログラムの認知である。音の場合には、50 ヘルツ程度の低周波は、音として聞こえないが、振動として皮膚で受け取っている。高周波の場合にも音としては聞こえないが、脳神経系が関与し受け取っている広大な領域があり、ことに 20 キロヘルツあたりに、脳にとってとても快感をもたらす波長域があることが知られている。一般には、コードは安定しており、コードの内部で認知が差異化をつうじて詳細になる。故美空ひばりが、「か」の音に対して二重の振動数で発声していたことが、今日ではわかっており、それが美空ひばり特有の情感を作り出していたことも知られている。

ところで机の上をゆっくりとなぜる場合と、一定の速度をもってなぜる場合では、判別される机の起伏やざらつきは、まったく異なってしまう。そのことは身体運動の維持に必要な限りでの認知しか行わず、身体行為にとって「余分な」情報は、おのずと「無視」されることによる。早足で歩きながら、足の裏でこまごまと地面を認知していたのでは、とても歩行はできない。歩行の維持にとって不要な認知的情報は、おのずと無視される。感知可能性を決めているコードが変化して、情報とならなかったのではなく、むしろ情報を「潜在化させてしまう」ような「無視」が働いていると考えたほうが良い。無視とはつね

に創造的無視である。触覚は、視覚とは異なる仕組みで働いている。これが身体運動と認知が連動する仕組みであり、視覚的認知情報と身体動作は、情報による指示でつながっているわけではない。そのため逆に単独で取り出された情報は、奇妙な仕方では運動とつながっていく。**情報は、無視とは別の仕方では出現する構造的な不自然さを備えている。**

哲学の困惑 このことは伝統的な認識論に、重大な異論を申し立てることになる。実はアリストテレスからカントまで、基本線では「視覚」をベースにして哲学の構想が組み立てられている。心穏やかにして身体や感情を動かさず、世界を精確に捉えるという認識の仕方は、アリストテレスではテオリア(観照)と呼ばれる。個物を作り上げる質料—形相の二つの要素で、質料を客観から受け取り、形相を主観性に備わったカテゴリーに置き換えて、両者が対象として構成されるという仕組みに転換すると、カントの認識論となる。このとき認識は、物から触発を受けて質料を受け取り、主観性という加工の仕組みを用いて、表象を形成する。認識は表象にまでは及ぶが、物自体に到達することはない。素材となる質料を受け取り、それを認識が加工するという仕組みは、視覚がこうした認識のベースとなっていること意味する。

他の感覚であれば、基本的に直接接触であるため、物とぶつかり、物の舌触りがあり、物に由来する感触があり、物からの振動がある。物に触れ、それを感じながら、自分の手を感じるという仕組みになる。これが身体をベースにした認識の基本である。このとき物に触れて「感じる」という働きと、触れている自分自身の手を「感じる」という二つの働きは、まったく異なっていることがわかる。一方は対象認識であり、他方は身体内感である。ここでは視覚をベースにしたことはまったく別のことが起きている。

哲学が「行為」をうまく語るができない理由がここにある。視覚と身体行為とは、繰り返し連動そのものを形成し続けなければならない領域である。そして多くの場合、行為の遂行にとって無駄な認知を回避しながら認知と行為の連動は形成される。この場合には、認識から行為が誘導されるだけではない。

現在のセンサーは、視覚情報をデータ化するのだから、身体運動への適合の場面では、いずれ従来型のモデルとは異なる課題が生じる。たとえばアメリカのイチゴ農家では、イチゴ取入れの大型機械が活躍している。センサーがイチゴを見つけ、見つけたイチゴに触手を伸ばして熟れ具合を認定して、その触手がイチゴを摘み取り、大型機械の後ろに備えた籠に入れていく。この場合には、センサーで読み取る能力は幾分かずつ細くなるが、モーターの動きはまったく同じパターンである。センサーから受け取ったデータを忠実に実行してただけである。自動運転制御装置も、事情は同じである。

自動運転機器の最大のもは、航空機である。離陸と着陸以外は、航空機は自動で運行している。船舶も似たようなものである。公海上を運行する船舶は、他船舶とすれ違う場面以外には、設定された航路を自動的に進むだけである。この自動制御の場面は、一般のオートイマトンの制御と同じで、リスク変数が一定値を超えなければ、同じ作動を繰り返してよいというプログラムで成立している。リスク変数の数もごくわずかで良く、別の飛

行機の移動を近距離で感知したとか、海のなかに巨大な生き物の往来を感知した場合には、警報音が鳴り、そのとき場合によっては自動運行を手動に切り替えて、操縦士が運航を担う程度でよい。センサーは新たなデータや判断を獲得していくが、それによってモーターの作動の仕方がさらに詳細になるわけではない。

ところが陸を走る車では、制御変数の種類と数は、比較にならないほど膨大である。閑散とした田舎道を走っている間はまだよい。都市部に入れば、対向車、信号、横断歩道をする人と動物、予想しにくい自転車の往来、高層ビルから発せられる微弱な電磁気、時として生じる落雷による電波障害と短期停電等々では、制御しなければならない多くの要因がからんでくる。衛星からの位置情報は、いつでも攪乱させることができ、また意図的に誤情報を流すこともできる。ロシアとウクライナのクリミアをめぐる戦争のときには、ロシアによるセンサー攪乱によって、ウクライナのミサイルや地上兵器は、徹底的に無力化されてもいる。

そのつどリスク変数が閾値を超えて警報音を発するのであれば、場合によっては自分で運転したほうがましだということにもなる。それでも学習能力のある AI であれば、こうした変数に対応するための技能を順次身につけて行くだろう。実際スエーデンで行われているように、無人街路清掃車は、歩行者のほとんどいない時間帯に、信号だけは守りながら、単純労働を繰り返している。しかしこれは電線を使って走る電気電車の運転手を無人にすることの延長上にあるだけである。

この範囲内でも相当に難しい問題は実際に起きている。たとえば対向車線のある交叉点で、自動運転自動車が右折するためには、対向車線を反対向きに走ってくる車をセンサーで敏感に察知し、右折可能かどうかを判定しなければならない。相手の車の速度と速度の変化率、交差点までの距離(時間)の縮小の割合を読み、右折可能かどうかを瞬時に判定しなければならない。当然のことながら横断歩道をわたる人間は、同時に捉えていなければならない。センサーの処理しなければならないデータは多様で膨大である。高度なセンサーの開発と学習機能の高度化には、まだまだ隙間が多すぎる。京セラの開発した高度センサー「ライダー」は、赤外線反射とレーダーを組み合わせ、障害物を認識する仕組みだが、相手の動きを読むプログラムがどこまで形成されるのかは不明である。

情報の時間 移動しながら眼前の物体を捉える場合、人間の認知では、自分自身と物体の間の衝突までの時間を知覚している。物が飛んでくるときに接近の割合は、衝突までの残り時間で知覚され、たとえば走り幅跳びの踏切板のように身体をそこに合わせる場合にも、残り時間が知覚されている。ところが人工的センサーは、地図上の位置情報と位置の変化だけで物の接近や移動を捉える仕組みを採用せざるをえない。というのもセンサーにとって、時間はあらかじめ外側に設定された座標軸だからである。物体の接近と衝突までの時間は、空間的な距離の縮小で二次的に割り出されるだけになる。ある意味でセンサーは一度も主体的であったことがない。主体性はつねに 2 次的に割り当てられた駆動体である。センサーには、基本的に時間経験がない。このことは制御変数の一つが最初

から欠落していることを意味する。

センサーとモーターのカップリング 制御情報変数の獲得だけではすまない場面が、次の段階である。動く車の運転の細かさに対応するための運動制御の技能の獲得が必要となる。道路脇を歩く歩行者が反対方向から来る自転車を避けるために、道路の中央に行くぶんか出かかったとき、それを察知してそのつど停車したのでは、車の運行とは言わない。センサーによる感知に対して、運動体はつねに複数個の対応可能性をもつ。

AI ではセンサーによる識別の技能向上と、モーターでの対応可能性は、一対一にはならない。センサーとモーターは異なるプログラムとして設定されると思われる。そうなるプログラム間の連動である「カップリング」の仕組みをどのように設計していくのが、重要となる。そしてそこには一対一の対応関係がなくても、作動を維持できる仕組みが必要となる。

この問題は複雑で根が深い。人間の発達過程で考えてみる。人間の場合、歩行が実行できるようになるのは1歳前後である。その手前では、移動能力がないまま認知能力は形成されていく。言語音を聞き取ることができるようになるのは、かなり早く、生後4ヶ月程度から聞くことはできるようになると言われている。視知覚で人物を見分ける能力も形成されている。センサー側の能力の形成は、運動能力とは独立に形成されて行く。歩行できるようになるとセンサーと歩行能力の連動を形成しなければならない。このときセンサー側の能力も、運動能力に合わせて再度形成される。物の運動を知覚するさいには、運動獲得以前には、ある物が別の物の陰に隠れたり、ある物が別の物を隠したりする「遮蔽」の知覚から行われている。ところが運動能力が獲得されると、物の運動は、ある位置から別の位置への移動で知覚されるようになる。物の運動は、空間的な位置座標で行われるようになる。空間や位置移動の獲得は、みずから運動することができることに遅れてくる。すると物の運動の知覚でさえ、センサーのプログラムを作り替えて、センサーとモーターの連動を形成しなければならない。この事例だと、モーターの能力形成に応じて、センサーのプログラムさえ組み換えていることになる。

人間の能力形成でみれば、運動能力の向上に応じて、認知能力は改変され新しく組織化される。そのとき運動の制御に活用されている情報が、生態的環境情報である。運動の速度調整や運動方向の調整に活用されているのが、オプティカルフローである。これは運動しながら認知されている情報であって、静止したセンサーが捉えた情報を元に運動が促されるのではない。オプティカルフローは、たとえば長い廊下を歩きながら、壁の通り過ぎていく度合いや変化の度合いのことである。変化についての情報は、AIだと微小時間記憶をもとに組み立てられるのだと思われるが、変化率にはおそらく当分対応できそうにない。運動するものにとって、運動の調整要因となるのが環境情報であって、環境情報から動きが作られるのではない。このあたりがAIと作りがまったく異なる点である。環境情報から動きが作られるように誤解が生じたのは、最晩年のギブソンが、「アフォーダンス」という誤った命名をしたからである。この誤解は、ギブソンのそれ以前の業績や成

果を台無しにするようなものでもあった。情報から行為が促されるのではなく、行為のさなかで行為選択と行為制御のために活用されるのが、情報である。そしてAIではこうした情報の処理は、これからの課題であるように思える。

モーターは、身体とはまったく別の作りをしている。実際にはモーターは駆動体であって、それによって動かされる身体は、たんなるボディである。ところが人間の身体は、触覚性の認知を備えた自分自身で動くものであり、たんなる被駆動体ではない。水の中で水泳の動きをするとき、水から押される感触をうまく活用するのでなければ、泳ぐことさえできない。こうしたことをセンサーで捉えることは容易ではない。身体の表面にセンサーを付けることは異なることであり、身体の動きのさなかで生じる感触こそ、感じ取られるべきものである。こうしてみるとAIによって形成される自動運転自動車には、多くの変数が欠落していることがわかる。

AIプログラムは、ある手続きに進むさいに、複数個の可能な手続きがあり、その手続きの選択が、その次の手続きの選択に影響をあたえ、この繰り返しの中から有効な選択とそうではない選択が決まってくる仕組みが含まれているはずである。この手続きの進行の有効/無効の区分が、AIの行う「判断」と呼ばれる。オートマトンに複数個の分岐が入れば、それぞれの分岐で前に自動的に進むことのできる回路を探り当てているはずである。そのときセンサーの有効性を決めるさいには、データの細かさ、データの整理の速さだけが問題になるのではなく、モーターのプログラムをどの程度改善するのかを指標する「カップリング回路」と、その指標が必要になる。センサーのデータだけ細かくなって、モーターのプログラムが改善されなければ、実質的な駆動体としては粗暴な運転しかできないことになる。そしてこれは気の遠くなるような作業であると現時点では予想される。誰もいない直線の夜道を延々と走る場合には、国際線の飛行機や大型船舶と同じ扱いでよい。だが自動運転自動車では、事情が異なる。

カップリングの典型事例で考えてみる。典型例として、ゲノムとタンパク質の連動がある。この場合には情報上の指令は、ゲノムからだけなされる。だがゲノムの作動のためには、RNAや多くのタンパク質の支えが必要である。ゲノムは、必要なタンパク質を作り出すが、そのさいには2、3割のまがい物のタンパク質が作り出され、それらはたんぱく質の活動ネットワークに組み込まれることはなく、再度分解されて次のタンパク質合成の材料として活用される。つまりこの程度のミスは、生物学的な試行錯誤のなかに含まれる。その場合には、既存のタンパク質とは異なっているとしても、それでも有効に機能する末端のタンパク質が含まれていてもおかしくない。

ところがAIは、こうした場面での試行錯誤を減らす仕組みが組み込まれていない限り、学習能力だと呼ばれないことになる。自動運転車の場合、試行錯誤とは事故が起きてもおかしくない状態のことである。AIは事故を起こしながら学ぶことはできない。しかしその試行錯誤の幅が一定程度含まれ続けることがなければ、学習の幅は維持されようがない。ゲームのプログラムの自己形成とは異なり、プログラムの試行錯誤には損傷が含まれ

る。ここが AI の一つのジレンマである。事故の可能性を減らせば、学習の幅が狭くなりモーターの改善の可能性は狭まる。他方モーターの改善の可能性を広く設定すれば、事故のリスクは高くなる。これは AI のカップリングのさいの「試行錯誤のジレンマ」とでも呼ぶべき事柄である。

AI の場合、情報処理だけであればどんどんと高度になる。だが運動制御は、それはそれで固有にプログラム化される。そのときセンサー側のデータ処理速度とモーター側の処理速度は、簡単には対応しない。人間の身体では、広範にデータを捨てる仕組みが備わっている。いわば「無視」と呼ばれるものである。無視があるので、プログラムのリセットが効く。AI による自動運転自動車は、正直に言えば、学習の仕方が狭すぎるのである。おそらく AI は、多くの変数を欠落させた状態で、2 次的に有効に機能する状態を見出ししていくに違いない。まぎれもなくそれは新たな学習の仕方だが、人間がそこから何かを学ぶには、あまりにも乖離が大きすぎる。特定の能力を過度に利用することは、他の能力の発現を抑制する。この宿命を最初から背負っているのが、AI である。

参考文献

- 大海悠太他「身体知研究会」『人工知能研究』(2019 年 9 月)629-634
- ギブソン『生態学的視覚論』(古崎敬他訳、サイエンス社、1985 年)
- クリプキ『ウィトゲンシュタインのパラドックス』(黒崎宏訳、産業図書、1983 年)
- 佐々木正人・三嶋博之(編訳)『アフォーダンスの構想』(東大出版会、2001 年)
- 佐々木正人・三嶋博之(編訳)『生態心理学の構想』(東大出版会、2005 年)
- シャノン『通信の数学的理論』(植松友彦訳、ちくま学芸文庫、2009 年)
- 高岡詠子『チューリングの計算理論入門』(講談社、2014 年)
- 西垣通『AI 原論』(講談社、2018 年)
- フロイト『フロイト全集 11 巻、「症例シュレーバー」その他』(新宮一成他訳、岩波書店、2009 年)
- ヘア『診断名サイコパス』(小林宏明訳、ハヤカワ文庫、2000 年)
- 松尾豊『人工知能は人間を超えるか』(角川書店、2015 年)
- メルロ＝ポンティ『見えるものと見えざるもの』(伊藤康夫他訳、法政大学出版、2014 年)
- ラカン『エクリ』(宮本忠雄他訳、弘文堂、1981 年)
- ロンバート『ギブソンの生態学的心理学』(古崎敬他訳、勁草書房、2000 年)